

VI-6

治療関連 MDS/AML を合併した骨髄腫症例の病態解析

鷓池直邦、油布祐二、崔 日承、大野博文、永澤恵理子、木附 康

独立行政法人国立病院機構九州がんセンター血液内科

【目的】骨髄腫の治療経過中に治療関連 MDS/AML (t-MDS/AML) を合併した症例の臨床病態を明らかにすることを目的とする。

【方法】1989 年から 2007 年 1 月までに t-MDS/AML で当科に入院した 7 症例を対象として解析した。

【結果】年齢中央値 72 歳(48 ~ 83 歳)、男女比 5/2 骨髄腫診断から t-MDS/AML 発症までの期間 62 ヶ月(6 ~ 119 ヶ月) t-MDS/AML 発症からの追跡期間 11 ヶ月(1 ~ 24 ヶ月) 骨髄腫に対する治療; 全例 MP 療法などのアルキル化剤を中心とした化療を繰り返し受けていた 全例 MDS(RCMD, RAEB, CMMoL 各 2, 3, 2 例)で発症し RAEB の 1 例が 6 ヶ月後に AML に移行した 染色体異常; 4 例が 7 番染色体(部分)欠失を伴う異常を認めた t-MDS/AML に対する治療; 6 例が輸血ないし VitD₃ などの投与のみであったが、RCMD の 1 例は bortezomib 投与で染色体異常が消失した t-MDS/AML の 50% 生存期間 15 ヶ月 現在も生存中であるのは 1 症例のみで他の 6 例は全例 t-MDS/AML で死亡した。

【結論】長期のアルキル化剤投与による 7 番染色体異常を伴う典型的な t-MDS 病態をとるものが多い。一端発症するとほとんどの症例が骨髄腫そのものではなく t-MDS/AML が原因で死亡している。bortezomib で骨髄腫が寛解に入った 1 症例で MDS クローンの消失がみられたことは、同薬剤がこのような症例の治療において有用である可能性を示した。